平成２７年３月１日発行

かまぼこ

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第５５号

わがまちの顔
元大相撲力士　龍虎さん
～都立大森高校から花籠部屋へ～

©時事通信社

本紙第五十三号・都立大森高校天文台の文中に登場した、大相撲の元小結でタレントの龍虎さんが、昨年の八月二十九日、循環器疾患のため亡くなりました。

一九四一年、大田区生まれの龍虎（本名・鈴木忠清）さんは、一九五七年、鈴木山という四股名で初土俵を踏みました。一九六六年、夏場所前に師匠の花籠親方から「漢字由来の四股名を名乗ると出世する」と勧められ龍虎と改名し、一九六八年春場所に新入幕を果たしました。初土俵から十一年かけての幕内昇進は当時の最スロー記録でした。

新入幕の場所で十一勝をあげ敢闘賞を獲得し、一九六九年五月場所では大鵬から初金星を上げ、一九七二年にも横綱北の湖から二個目の金星を獲得しています。

昇進後は美男子力士として人気を博し一九七〇年春場所では念願の三役小結に。その後、左アキレス腱断裂で幕下まで転落しますが、リハビリに専念し再入幕を果たし、一九七五年、再び小結に帰り咲きました。三役から幕下まで降下し、再び三役にカムバックするという非常に珍しい記録を残しています。

しかし、一九七五年、五月場所の初日、前頭四枚目・旭国戦で今度は右アキレス腱を切断、三度目の大怪我でついに現役を引退しました。現役在位百十場所で、通算成績は五百六十三勝五百十一敗という数字を残しています。

引退後は年寄り十六代放駒を襲名しましたが、一九七七年に日本相撲協会を退職し、タレントに転向。四股名の龍虎を芸名にし、本格的に芸能界に進出しました。親方時代の一九七六年一月スタート、一九九〇年三月までＴＢＳ系名物試食番組「料理天国」に出演し、試食後の感想として述べる「おいしいですね」は龍虎さんのキャッチフレーズとなりました。

俳優としてもテレビ朝日系「暴れん坊将軍」「名奉行・遠山の金さん」テレビ東京系「大江戸捜査網」などの時代劇にレギュラーとして、舞台では「北島三郎座長公演」等に出演。大相撲のご意見番としてテレビ、ラジオの情報番組のコメンテーターとしても活躍しました。

二〇一四年八月二十九日、家族旅行で静岡県掛川市の事任（ことのまま）八幡宮を訪れ、階段を上っている途中、体の不調を訴え、救急搬送されましたが、ついに帰らぬ人となりました。

享年七十三歳。

（取材　飯嶋委員）

参考文献
日刊スポーツ紙（2014/8/31）
スポーツニッポン紙（2014/8/31）
デイリースポーツ紙（2014/8/30）

ご存知ですか？
蒲田にあった闇市

闇市（やみいち）とは何らかの物価を統制する体制下で、物資が不足した状況における、統制に外れ非合法に設けられた独自の市場経済原理で取引を行う市場のことを言い、ブラックマーケットやヤミ市と表記する場合もあります。

大田区では最大の商業地ですが、町工場と電子工学院とユザワヤが有名なまち・蒲田。再開発により大きく様変わりしましたが、昔ながらの街も少しは残っています。

井伏鱒二「本日休診」、坂口安吾「白痴」、松本清張「砂の器」、つかこうへい「蒲田行進曲」、絲山秋子「イッツ・オンリー・トーク」、と数多くの文学作品の舞台に選ばれた蒲田ですが、元々はのどかな田園地帯でした。

一九二〇（大正九）年の松竹キネマ蒲田撮影所の開設に合わせて商店街も発展し一九二二（大正十一）年に目蒲線と池上線が開通すると急速に都市化が進みます。

「蒲田町史」では蛙の鳴く田圃→映画の都→コケティッシュな都と蒲田の歴史を紹介しています。

左は一九五三（昭和二十八）年、未だ戦後の闇市の面影が残る蒲田駅西口の夜景です。翌年に蒲田駅西口商店街は東京都商店街コンクールで東京都経済局長賞を受賞。『大田区民新聞』に「大田区内で一番人出の多い繁華街」と紹介されました。

蒲田駅西口 1953（昭和28）年

写真／大田区史下巻六二〇ページ

敗戦後の焼けあとでは、生活必需品の流通をめぐって、繁華街を中心に、路上での取引が始まった。蒲田駅周辺の露店「青空市場」は、一九四六（昭和二十一）年に入ってますます盛んとなり、四月に不衛生であると閉鎖を命じられたが、六月二十日、「復興マーケット」として再開した。（大田区史・下巻六七二ページ）

近隣にお住まいのお年寄りから思い出をお聞きしました。「終戦直後はゴザやムシロを広げた上に品物を置いたり、中には土の上にそのまま品物を置いて、売買をしていました。また、徐々にテントかけや、バラック小屋に成長していきました。食料品や日用雑貨、古着から新品の衣料などもありました。屋台の飲み屋ではドブロクやカストリなどが売られ、工業用のアルコールを水で薄めたような粗悪な酒を飲んだせいで、視力を失う人や亡くなってしまう人もいました」。

蒲田は昭和二十年代終わりにはすでに大田区内で一番の人出を誇りますが、西口は東口よりも区画整理が遅れ、「戦後の『闇市』の面影を残した蒲田西口は欲望の熱気がうずまく、きわめて妖しい雰囲気を残す街だった」のです。

（取材　大良委員）

蒲田西特別出張所管内

人口	男	31，691人
	女	29，326人
	計	61，017人
世帯		33，896世帯

平成27年2月1日現在

編集後記

いつもかまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。読者の方からのご意見、ご感想、鋭いご指摘などを頂けることに感謝し、調べた情報以上に、地域の歴史や知識を教えていただき、日々勉強の毎日です。また、かまにし17では随時、投稿も募集しておりますので、お気軽にお寄せください。（内容については編集委員会で審査させていただき、掲載することになります。）

あなたの名前を、投稿を、かまにし17に残してみませんか？

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

女優　高峰秀子

松竹蒲田時代にスポットをあてる

昭和二十六年十二月、映画雑誌「キネマ旬報」が評論家や映画業界関係者ら百八十一人のアンケートから日本映画の男優・女優のベスト・テンを選出した。

女優部門のトップは高峰秀子であった。

紙面の都合で今回は、松竹蒲田、子役時代の高峰秀子に絞り、いくつかのエピソードを紹介する。

生い立ち

大正十三年三月二十七日、平山錦司・イソ夫婦の長女・秀子として、北海道函館に生まれる。祖父・力松は、劇場やカフェを経営する土地の実力者で、長男の錦司はいくつかの店舗経営を任されていた。秀子が生まれたのは「マルヒラ・砂場」という料亭であった。上に三人の兄、のちに弟・孝市郎が生まれる。

昭和三年、秀子四歳の時、母イソが結核で死亡。かねて秀子を養女にと望み、名付け親にもなっていた父の妹「志げ」の養女となる。

志げは秀子の生まれる前、流れ者の活弁士・荻野市治と駆け落ち同然に結婚し、生計のため女活弁士をして僅かな金を稼いでいた。秀子の入籍当時は二人とも活弁士を廃業し、東京市谷中の鶯谷に間借り住まいをしていた。旅回りの興業ブローカーとなっていた養父は、ほとんど家には寄り付かず、志げの内職針仕事でほそぼそと生計を立てていた。

天才子役誕生

養父に背負われ、蒲田撮影所の門を潜ったのは五歳の春（自伝・私の渡世日記）だった。

家主の友人だった松竹蒲田の俳優・野寺正一に案内され、一家で蒲田撮影所の見学に来た。秀子が養父と一緒に外出したのは、この日が初めてであった。

偶然、『母』という映画に出演する子役のオーディション当日であった。美しく着飾った同年輩の少女、五～六十人が撮影所の空き地に一列に並んでいた。十人ほどの撮影所のスタッフが、女の子の顔を覗いたり、話しかけたり。子供たちの後ろには付き添いの父や母が硬い表情で整列していた。

その光景を目にした養父は突然、背負っていた秀子を列の最後尾に並ばせ、自分は後ろへ下がってしまった。監督を先頭に徐々に近づいてくる大人たちを見て、秀子は子供ながらに「これから自分も試される」と分かった。その時のやり取りは全く覚えていないが、聞かれたことには、はっきりと返事をしていた。

驚くことに、飛び入り参加の秀子に採用の通知が届いた。撮影所に呼び出された養母は「台本」を受け取って戻って来た。

十月一日付けで松竹蒲田へ入社、養母が女活弁士時代の芸名をそのまま付けて高峰秀子を名乗る。

デビュー作品『母』

『婦人倶楽部』に連載された鶴見祐輔の代表作で、監督は野村芳亭。出演者は川田芳子、八雲恵美子、吉川満子、川村黎吉らで蒲田を代表する俳優陣であった。秀子は幸福に満ち溢れる家庭で育つ兄妹の妹役を演じた。しかし突然の不幸に襲われる、病死した父親に次いで、母も亡くすという逆境に立たされる五歳の娘を見事に演じきった。

昭和四年十二月一日に封切りされた映画は大ヒットして浅草では再上映、更に翌年もアンコール上映され、四十五日間という興業記録を作り、見事なデビューを果たした。

『母』の大ヒットの勢いに乗り、重宝な子役として次々に出演依頼が続き、瞬く間に子役としての評価を得ていった。

初任給は三十五円、住居も撮影所近くの蒲田町北蒲田に移った。

昭和十一年一月、撮影所が蒲田から大船に移転するまでの六年間に、三十六作品に出演した。

秀子より歳は若干下だが、同世代と言えるアメリカの子役シャーリー・テンプルとよく比較された。男の子のように活発で、大人顔負けの演技をこなすシャーリー・テンプルは子役ながらハリウッドで大人気を博した。子役としての秀子にも、それに通じる活発さがあった。

蒲田松竹最後の撮影は『永久の愛　ラムール・エテルネル』。栗島すみ子、田中絹代、藤野秀夫、川村黎吉らと共演。大船移転のための『蒲田さよなら映画』であるとともに栗島すみ子の引退記念映画でもあった。

蒲田小学校

昭和六年、秀子は蒲田尋常小学校へ入学するが、撮影の合間を見て月に三日か四日、行けるかどうかであった。一年生の担任であった指田先生が心配して何度か家を訪ねてきて、事情を察してくれた。京都の下加茂撮影所や地方ロケで長期の休校を届けると、出発前には何時も二、三冊の子供雑誌を届けてくれた。秀子は先生に貰った絵本を汽車の中で見ながら字を覚えた。秀子に言わせれば「指田先生は神様」のような存在（自伝・私の渡世日記）であった。

秀子はこんな話もした「何年生の時か覚えていないが、一回だけ運動会に出たことがある。駆けっこでは皆の最後をゆっくり走った。転んで膝小僧を擦りむいたら、画（映画の画面）が繋がらなくなるから」。わずか七、八歳の子供がそんなことを考えて走っていた。

昭和七年、八歳で明治座の新派公演『松風村雨』に借り出され、実母役の花柳章太郎、義母役の岡田嘉子相手に臆することなく共演。同時公演の『満州国』でも中国服を着て皇帝溥儀の幼年時代を演じ、天才子役の名を一層高めた。同年十一月、大阪歌舞伎座の新派公演にも招かれ、再び花柳と母娘を演じた。

東海林太郎との出会い

昭和九年、五所平之助監督の親友で、当時、蒲田撮影所の顧問であった作詞家の藤田まさとに、とくに可愛がられた。歌手の東海林太郎が『赤城の子守唄』大ヒットを記念して、日比谷公会堂で実演ステージを催すことになり、演出を手がけた藤田まさとの依頼で勘太郎役に出演した。大好評となり、有楽座でも再演された。

浅太郎に背負われた勘太郎役の秀子は、他人の台詞まですべて覚えていた、台詞につっかえる東海林の耳元で台詞を囁き、また秀子を背負って歌う東海林が辛かろうと、胸を締めつけている紐を前に引っ張るなど、すべてに機転の利く子供であった。

すっかり秀子を気に入った東海林は藤田を通じ、養女にしたいと言い出した。「ピアノと声楽を教え、小学校を卒業したら女学校に入れる」その条件に惹かれ養母と秀子は、西品川の東海林家に移った。

東海林の秀子に対する溺愛は異常とも言えた。夫婦の寝室で共に寝起きし、片時も離さず、地方公演先までも連れて行く。あげくの果て秀子の取り合いで夫婦喧嘩も度々であった。約束のピアノ、声楽の練習はさせてもらえず、撮影所通いもままならなくなった。

一方、夫とも別れ、秀子に全てをかけた義母・志げであったが、東海林家では女中がわりに無給で働かせられた。二年近く我慢してきた秀子は義母をうながし、裸同然で東海林家を出て大森に家を借りた。

仲に入った藤田まさとは激怒した。大ヒットしていた『旅笠道中』に続いて東海林太郎のために書いた『妻恋道中』『鴛鴦道中』シリーズを無名の新人・上原敏に歌わせ、上原敏はやがて東海林太郎を凌ぐ大歌手に成長していった。

昭和十一年、松竹は撮影所を蒲田から大船に移設。秀子も子役から娘役に、そして戦後の混乱期を乗り越え大女優にと成長していった。

（取材　都築委員）

参考文献
「私の渡世日記」（上・下）　高峰秀子　文春文庫
「高峰秀子の捨てられない荷物」　斎藤明美　文藝春秋
「別冊太陽・高峰秀子」　平凡社
「現代日本映画人名事典　女優篇」　キネマ旬報社
「高峰秀子」　キネマ旬報社